

研究 成 果 報 告 書

(ふりがな) さとう かつのり

氏 名 佐藤 克宣

現 職 (所属名、職名等) 北海道岩見沢東高等学校, 教諭

修了又は卒業年月、専攻又は専修コース名 平成22年3月, 教科・領域教育専攻社会系コース

研究テーマ 高等学校「倫理」ロゴスに従うソクラテスの考察にもとづく授業実践

ークリトンとの対話状況の分析を題材としたディベート学習の試みとしてー

1. はじめに

本研究の目的は、『クリトン』にあらわれるソクラテスとクリトンの主張を読み取るとともに、両者の考えを理解するための授業の実践とその検証にある。まず、『クリトン』における先行研究を踏まえて、クリトンがソクラテスに脱獄を説得する場面をもとに本稿の筆者により読解をすすめる。その後、読解により明らかとなったソクラテスとクリトンの考えを踏まえて授業計画を立てる。その上で、授業を実践するとともに授業の実践後の生徒の理解状況を検証したい。実際の授業の具体的な方法としては、ディベート学習の手法と「トゥールミンモデル」¹を参考とした論理の構成方法を用いる。ディベート学習は、ソクラテスとクリトンの主張が衝突する場面をもとに両者の主張を整理し、生徒の考え方を深めることを目的とする。「トゥールミンモデル」は、生徒が共通の論理を構成する形式を用いることで、ディベートにおける議論をかみ合いやすくするために用いた。授業の検証は、ディベート実施前と実施後にクリトンとソクラテスのいずれを支持するかについてのパフォーマンス課題への記述状況の確認より行う。

2. 『クリトン』の先行研究

『クリトン』は、死刑執行を獄中で待つソクラテスに、脱獄を持ち掛け説得しようとするクリトンとの対話を描いた作品である。先行研究は、作品の前半部分と後半部分を対象としたものに分けることができる。前半部分は、クリトンによる説得とソクラテスがクリトンの主張を吟味するかたちで進行する部分を中心である。後半部分は、新たな国法という人格を登場させ、個人と国家の関係のもと議論が進む。後半部分における具体的な先行研究としては、国法の弁が妥当であるか否か²、ソクラテスにとって法とは何であるか³等が議論されている。本稿は、作品の前半部分を取り扱う。

3. 『クリトン』の読解 (44b6-49e8.)

クリトン：ソクラテスが行おうとしていることは、正しいこと (dikaion) ではないように思う。あなたは、行動をおこせるのに、自分自身を見捨てよう (pulodunai) としている (45c6-7.)。

クリトンは、脱獄をせずに刑死の執行を待つソクラテスの行動が正しくないと主張する。理由は、ソクラテスの行動が正に彼の敵となる者が懸命に努力しそうなことだからという⁴。要するに、ソクラテスが自ら敵に手を貸しているようなものだからである。クリトンは、ここで初めて「正しさ」について言及する。脱獄しないという行為が正しくないとこの言及は、クリトンの判断である。しかし、刑死を甘んじて受け入れると

いう敵に益となる行為にわざわざ従うことが不正であるとの判断は、クリトンの個人的な判断だけとは言い切れない。そこには、ポリス社会における伝統的倫理観をみることができる⁵。ポリス社会は、自分たちの生活に直結する秩序を守ることが最善であった。したがって、自ら敵にダメージを与えるための戦いによる死は、正しい行為をした結果として賛美されうるものであった⁶。敵に無抵抗で自らにダメージを負う行為は、敵に隷属し自らの自由を放棄することに他ならない。自由を放棄することは、侵略を受け入れ隷属を強いられることを認めることと同義である⁷。クリトンの主張は、この行動原則に基づいてものといえる。したがって、クリトンの主張の背景には、ポリス社会における正しさをみることができよう。

ソクラテス：ただ自分が論理的（logizomeno）に考えてみて最上と思われたロゴスだけに納得して従う（peithesthai e to logo）（46b5-6）。

これは、ソクラテスがこれまで自分が有してきた考えという⁸。クリトンの主張は、敵に害を与え自身に利益をもたらすことを基底とする。しかし、ソクラテスの主張は、害や利益という考えそのものを度外視している。クリトンの考えは、敵に害をもたらすことは正しく自分に不利益を被ることは正しくないというものである。これに対してソクラテスの主張は、場面や状況で行為の善し悪しが変わることはない。彼がいうロゴスにおいて、該当行為が最上にならなければ如何なるものであっても認めるわけにはいかない。つまり、ソクラテスの判断基準は、ロゴスそのものが最上となりうるか否かという判断にある。ロゴスとして認められれば、自身が不利益を被る場面に遭遇したからといって、従わないことにはならない。自分にとって利益となるかならないかを問題としないのがソクラテスの立場である。このことから害や利益から離れたところに、ソクラテスのいう最上のロゴスがあることは間違いない。

クリトンは、ポリス社会の価値観を大多数の人々を重視する姿勢を主張することで垣間みせた。ソクラテスは、クリトンの主張に対して、ロゴスへの従いを主張する。それは、自己の利益を一切考慮にいれず、また、物事に対する様々な条件を含むことなく、単に我々が用いるロゴスとしての正しさを確かめようとしたものであった。

4. 実践授業について

本実践授業は、平成27年6月8日（月）～18日（木）に3学年選択倫理で実施した。授業方法は、ソクラテスとクリトン両者の論理の理解を深めるためのディベート学習による。より活発なディベートとするためには、主張の論拠をどれだけ構築できるかが要となる。そのため、ソクラテスとクリトン両者のテキストを詳細に読み取ることができるよう解説した後に、論理を構成する方法及びディベートの方法を指導した。

「ディベート」は、大きく二つの特徴からなる。一つめは、意見の対立を条件とすることであり、その意味で「話し合い」や「討議」の手法とは異なる。二つめは、「討論」のように、最終的に意見を調整または、統合するかたちで解決を求めない点である。つまり、互いの主張が対立していることを前提として、正当性をたたかわせるものである¹⁰。その意味では、単なる話し合いや意見が対立せずとも成立する討論と異なる。本授業実践で取り混ぜるディベートは、松尾氏による「教室ディベート」の定義に基づいたものである¹¹。

5. パフォーマンス課題の検証

パフォーマンス課題は、ディベート学習の取り組み前と取り組み後の2回、ワークシートに記入するかたちで取り組んだ。内容は、生徒自身がソクラテスとクリトンのいずれの考え方を支持するかを選び、その理

由を述べることにある。ループリックのA段階のポイントは、「説得力」があるか否かという点にある。したがって、それぞれの考え方を支持する論拠を用いなければならない。それが、相手の主張の欠陥を指摘するものであるのか、何らかの事例を用いるかは問わない。支持する部分とそれを正当づける論拠の構成が評価の基準となる。表1は、課題の評価の結果をまとめたものである。

表1 テーマ学習「脱獄することは正しいか」の評価分布 佐藤作成

尺度 (scale)	【ワークシートの評価の観点】	ディベート前の評価		ディベート後の評価	
		人数	%	人数	%
A	「脱獄することは正しいか」についてソクラテスとクリトンのいずれかの主張を用いて、説得力のある説明をすることができる。	4	13.8	13	62.1
B	「脱獄することは正しいか」についてソクラテスとクリトンのいずれかの主張を用いて、自分の意見を述べるることができる。	18	62.1	8	33.3
C	「脱獄することは正しいか」についてソクラテスとクリトンのいずれかの主張を用いて、述べた自分の意見が不完全である。	7	24.1	3	12.5

※ディベート前と後の評価人数の違いは、欠席による。

6. おわりに

クリトンの主張に含まれる価値観は、当時のギリシャ世界に根ざしたものであるとともに、我々にとっても違和感の少ないものであった。理由は、共同体に生きる上での必要な論理を多分に含んでいるからである。したがって、我々は、クリトンの主張を完全に否定することができない。しかし、ソクラテスは、クリトンの考えを反駁する。彼が反駁できるのは「自分が最上だと思ふロゴス（言論）にしたがう」という考え方を有しているからである。「ロゴスに従う」とソクラテスがいう時、その判断には、我々が通常判断する時に考慮する利益や不利益を一切含まなかった。ソクラテスは、脱獄そのものを判断する際、自己の立場が死刑を執行される当事者であろうがなかろうが関係なかった。自身の立場に左右されず、該当する行為そのものが正しいか否かを探求した。このことから、ソクラテスの吟味は、「ロゴスに従う」という基底があって、初めて成立するものであった。したがって、「ロゴスに従う」という姿勢が、ソクラテスの考え方として最も優先すべきものであったと結論づけられる。

本実践授業で明らかとなったのは、『クリトン』の前半部分における両者の主張を理解する上でのディベートの有効性である。しかし、ただ単にディベートを実践すればよいというわけではない。テキストの読解、グループでの話し合い、論理構成の方法そして、ディベートの練習を経てのディベートの実施という意味である。テキストの読解の段階では、よく分からなかったことが、ディベートにより他者の考え方に触れることによって理解が深まったことは、ワークシートの記述で確かめることができた。このことから、ソクラテスを取り扱う上で、対話形式の部分を理解させるための授業方法としては、効果的であった。

-
- 1 このモデルは、論理学として法律分野の論理形式を扱うことによって、これまで対応しきれなかった現実における実際の議論を検証できる論理学を描くことを目的としている。現実の問題を取り扱えることからスピーチコミュニケーションの研究分野において、いち早く取り組まれた理論といえる。(スティーブン・トゥールミン, 訳 戸田山和久, 福澤一吉, 『議論の技法 トゥールミンモデルの原点』, 東京図書株式会社, 2011.)。本稿では、ディベートを行うための準備としての資料を作成する場面でこの手法を用いる。
 - 2 小島和男, 「ソクラテスの語る国法の弁—『クリトン』51B2~8について」, 学習院大学大文学部研究年報 54 号, 2008.
 - 3 兼子盾夫, 「ソクラテスに於ける法 (nomos) と正義 (dike) 」, 相模工業大学紀要第 13 号第 1 号, 1979.
 - 4 本稿は, *PLATONIS OPERA, RECOGNOVIT BREVIQUE ADNOTATIONE CRITIA INSTRUXIT, IOANNES BURNET*, Oxford, 1967. の『クリトン』をテキストとし, 田中美知太郎 訳, 『プラトン全集 1』「クリトン」, 岩波書店, 1975. を参考に訳した。以下, 当該テキストを Cr. と略記する。Cr., 45c.
 - 5 ポレマルコスによって言及される「友には利益を与え, 敵には危害を加えること」が正義であるとの内容は, ポリスの倫理観として認められる(前掲書, 中澤努, p. 24.)。
 - 6 藤澤郁夫, 「デモクラティアの理念と生活習慣—ペリクレスの場合, Thucydides Historie, II. 35-46」, 上越教育大学研究紀要 第 15 卷第 1 号, 1995, p.1.
 - 7 田中美知太郎, 「自由のギリシア的理解」, 西洋古典学研究 10, 1962.
 - 8 Cr., 46b.
 - 9 読解より明らかになったのは, クリトンとソクラテスの主張の背景である。クリトンの主張は, ポリス社会を背景にした論理である。彼が全力でソクラテスを説得しようとする時, 自信を持って用いることができるのは, 彼が経験してきたポリス社会の価値観のみであった。一方, ソクラテスは, ロゴスへの従いを主張する。彼がいう「従い」は, 彼が主張してきた神への従いの「従い」と同様のものである。それは, 自己の利益や自己への影響を全く考えずに従うことを意味した。
 - 10 松尾正幸・佐長健司編, 『ディベートによる社会科授業づくり』, 明治図書出版, 1995. 8, p. 9.
 - 11 教室ディベートは「イ肯定側と否定側にはっきり分かれる論題について, ロ形式的に, 両派に分かれ, ルールに従って, 立論と反駁(尋問)を行い, ニ審判が, 説得力の視点から勝敗を判定する, 討論の一種としてのゲーム」と定義される(前掲書, 松尾正幸・佐長健司, p. 10.)。